『ゴージャスお宝鑑定家～「う～ん、ゴージャス！」12』詳細脚本

ジャンル：コメディー映像作品

上映時間：80分超

【オープニング】

シーン1：剛田質店の朝

（カメラは剛田質店の外観を捉える。豪華な看板と花壇が飾られているが、周囲の質素な街並みとは対照的。）

（カメラは店内に移り、壁には高価そうな絵画や工芸品が並ぶ。細部まできらびやかな店内装飾が映し出される。）

（奥から剛田が現れる。身にまとったシルクのローブが豪華絢爛で、ゆったりとした歩みから「優雅」を体現している。）

剛田

（深呼吸をし、天井に向かって）

「おお、この香り…これぞゴージャスの朝だ！今日もお宝たちが我が手元に集う予感がする。」

（店内の掃除をしている白金が画面右から現れる。エプロンをつけて、手にモップを持っている。）

白金

（無愛想に）

「剛田さん、その『ゴージャスの香り』って何ですか？僕にはただの芳香剤の匂いにしか感じませんけど。」

剛田

（振り向き、眉を上げて驚き）

「白金くん、まだ分からないのかね？この店の空気そのものがゴージャスなのだよ！ほら、感じてみたまえ。」

白金

（深いため息をつきながらモップを動かす）

「はいはい、ゴージャスですね。掃除もゴージャスに進めますよ。」

剛田

（モップを奪い取り、優雅に振り回す）

「違う！モップの動きにも優雅さが必要だ。こう、舞うように…リズムを意識するのだよ！」

白金

（目を丸くしながら）

「剛田さん、それただの掃除じゃなくて舞踊です。」

シーン 2: お客様の登場

（店の扉が優雅な音を立てて開く。中年の男性が控えめに入ってくる。服装は普通だが、大事そうに木箱を抱えている。）

お客様

（緊張した様子で）

「あの…こちらで鑑定をお願いしたいんですが。」

（剛田は木箱に目を留め、素早くお客様に近づく。白金が後ろからやや心配そうに見守る。）

剛田

（微笑みながら）

「ようこそ、剛田質店へ！お客様、あなたのような方がこの店を選んでくださるとは、実に光栄です。」

（剛田、木箱を優雅に受け取り、そっと台の上に置く。）

剛田

「さて、この中に眠るお宝とは…？」

（カメラが木箱をズームアップ。ゆっくりと開けると、中には美しいトパーズで作られたリコーダーが輝いている。）

剛田

（目を大きく見開き、息をのむ）

「なんという…なんというゴージャスさだ！トパーズとリコーダー、この組み合わせは大胆かつ繊細！」

白金

（横から覗き込みながら）

「リコーダーって、あの学校で使う楽器ですよね…？素材が違うだけで、そんなに価値があるんでしょうか？」

剛田

（白金を見下ろし、軽く頭を振る）

「白金くん、それは君がリコーダーの真髄を

知らないからだ。楽器は音を奏でるだけではない。それ自体が芸術品であり、夢を運ぶ存在なのだ！」

【シーン3：鑑定開始】（続き）

（剛田が慎重にリコーダーを手に取る。白金がメモ帳を広げて横で見守る。お客様は落ち着かない様子で椅子に座っている。）

剛田

（リコーダーを輝かせるライトを当てながら）

「見たまえ、この透明感。そして色彩の奥に潜む黄金の輝き。これがトパーズの魅力だ。」

白金

（冷静に）

「えっと、確かトパーズって11月の誕生石ですよね。美しいのは分かりますけど、それがリコーダーにどう影響するんですか？」

剛田

（目を閉じて、静かに語り始める）

「トパーズには、古くから数々の石言葉がある。『希望』『友情』『誠実』…。これらはただの言葉ではない。それぞれがこの宝石に込められた人々の思いなのだ。」

白金

（筆を止めて少し興味を持つ）

「へえ…。じゃあ、このリコーダーにはどんな意味があるんですか？」

剛田

（感慨深げにリコーダーを掲げる）

「白金くん、このリコーダーはただの装飾品ではない。音楽という形で希望を奏で、友情をつなぎ、誠実な心を響かせるもの。まさに、石言葉と楽器が融合した究極のゴージャスと言えよう！」

白金

（やや呆れ気味に）

「すごい理屈ですね…。でも、まだ音が出ないのが致命的な気がします。」

剛田

（真剣な顔で）

「それが問題ではない。重要なのは、このリコーダーに込められた『意図』だ！」

【シーン4：石言葉の熱弁】

（剛田がリコーダーを台の上に丁寧に置き、お客様に向き直る。）

剛田

（目を輝かせながら）

「お客様、このトパーズ製のリコーダーには特別な意味が隠されているのではありませんか？」

お客様

（戸惑いながら）

「え？意味ですか？あの、祖父が持っていたものなので、特に深い意味は…。」

剛田

（満面の笑みでお客様の肩を軽く叩き）

「いや、きっとあります！トパーズの石言葉が示すように、これはお祖父様があなたに託した『希望』なのです！」

（剛田、店の棚から別のトパーズの彫刻を取り出して見せる。）

剛田

「例えばこのトパーズの彫刻。これは19世紀の彫刻家が恋人への誠実な思いを込めて作ったもの。美しいでしょう？」

白金

（横で小声で）

「それ、関係ありますかね？」

剛田

（無視して話を続ける）

「そして、こちらのリコーダーも同じく、持ち主の思いが込められたものに違いない。お客様、お祖父様がこのリコーダーをどのようにして手に入れたのか、ご存じですか？」

【シーン5：お客様の回想】

（お客様の顔が少し柔らかくなる。画面は回想シーンに切り替わる。）

お客様（回想）

「祖父は音楽が好きな人でしてね。よく私たちに、音楽を通じて希望を持ちなさいと言っていました。このリコーダーも、祖父が海外で見つけて、家族みんなで楽しむために買ったんです。」

（画面には、若かりし頃のお客様と祖父がリコーダーを吹いている姿が映る。）

お客様（現代に戻る）

「でも、祖父が亡くなってからは、ずっと箱にしまったままでした。もったいないと思いまして…。」

【シーン6：剛田の哲学】

（剛田が静かに頷き、リコーダーを撫でるように手に取る。）

剛田

「お客様、それこそがこのリコーダーの価値なのです。お祖父様が込めた希望、そして家族をつなぐ友情…それらを形にしたこの一品こそ、まさにゴージャス！」

白金

（腕を組んで考え込む）

「つまり、これは値段じゃなくて思い出の価値があるってことですか？」

剛田

（微笑みながら白金を見つめ）

「そうだ。ゴージャスとは値段や豪華さだけではない。それは人々がその品に込めた魂なのだ。」

白金

（少し感動した表情で）

「剛田さん、たまにはいいこと言いますね。」

剛田

（満面の笑みで）

「もちろんだとも。ゴージャスたる者、優雅でなければ！」

【シーン 7: リコーダーの音が出ない謎】

（剛田と白金がリコーダーを詳しく調べ始める。お客様はそわそわしながら二人を見守る。）

白金

（リコーダーの穴を覗き込みながら）

「剛田さん、これ内部に何か詰まってますね。」

剛田

（優雅にリコーダーを回転させながら）

「ほう、詰まりとは…何ともゴージャスな障害だ。」

白金

（困惑しながら）

「詰まりにゴージャスも何もないですよ。ただの異物じゃないですか？」

剛田

（目を輝かせて）

「いや、違う！異物でさえも、このリコーダーに込められた物語の一部なのだよ！」

（剛田、リコーダーを慎重に分解し始める。お客様が驚いた声を上げる。）

お客様

「えっ、壊れませんか？」

剛田

（自信満々に）

「ご安心を。この剛田が手を下す限り、お宝に傷一つつくことはない！」

（剛田の手元にズーム。リコーダーの内部から、小さな巻物のようなものが出てくる。）

白金

（驚いて）

「な、なんですかこれ！？リコーダーの中に紙が詰まってる…？」

剛田

（巻物を広げ、真剣な顔で文字を読む）

「これは…！」

【シーン8：巻物に隠されたメッセージ】

（巻物には古い文字で何かが書かれている。画面は剛田の驚愕した顔をクローズアップ。）

剛田

「白金くん、お客様、これは大変なことだ。このリコーダーには、隠されたメッセージがある！」

白金

（巻物を覗き込む）

「えっと…『この楽器は家族をつなぐ架け橋である』って書いてありますね。」

お客様

（感動した表情で）

「祖父の言葉だ…！よく私たちに、『家族を大切にしなさい』って言ってました。」

剛田

（感慨深げに）

「なるほど、このリコーダーは単なる楽器ではない。お祖父様が家族への思いを込めて、この中に大切なメッセージを隠したのだ！」

【シーン9：リコーダーの音色を取り戻す】

（剛田が巻物を慎重に取り出した後、リコーダーを再び組み立てる。お客様が緊張した面持ちで見守る。）

剛田

（リコーダーを手に取り）

「これで、リコーダーはその本来の力を取り戻したはずだ。さあ、音を奏でよう！」

（剛田がリコーダーを吹くと、澄んだ音色が店内に響く。）

白金

（目を丸くして）

「おお…ちゃんと音が出ましたね！しかも、なんだか普通のリコーダーよりも綺麗な音…。」

剛田

（満足げに微笑みながら）

「これこそが、トパーズの魔法。そしてお祖父様の思いが生んだ奇跡の音色だ。」

お客様

（涙を浮かべながら）

「祖父の思いを感じます…。これを売るなんて、とんでもないことでした。持ち帰って、大切にします。」

【シーン10：剛田の提案】

（剛田が手を上げて、お客様を制止する。）

剛田

「お客様、お待ちを。あなたがこれを持ち帰るのは素晴らしいことだ。しかし、このリコーダーにはもう一つの役目がある。」

お客様

（困惑して）

「もう一つの役目…？」

剛田

（微笑みながら）

「それは、この音色をもっと多くの人々に届けることだ。この店でしばらく展示し、多くの人に見ていただくのはいかがでしょう？」

白金

（驚いて）

「え、剛田さん、買い取らないんですか？」

剛田

（胸に手を当て、優雅に）

「ゴージャスとは、ただ所有することではない。共有することによって、さらに輝くのだよ。」

お客様

（少し考えてから頷き）

「そうですね…。祖父もきっと、皆さんに楽しんでもらうことを喜ぶと思います。」

【エンディング】

（店内にリコーダーが特別展示され、多くの人が訪れる様子が映る。剛田は満足げにその様子を見つめ、白金は帳簿をつけている。）

白金

（小声で）

「これ、結局タダ働きになってる気がするんですけど…。」

剛田

（大きく笑いながら）

「白金くん、それもまたゴージャスな経験だよ！」

（画面がフェードアウトし、「う～ん、ゴージャス！」の文字が大きく表示される。）